

「知事賞」

鉛筆物語

安部 瞳（大阪府）

今日もにぎやかな教室で授業が始まる。クラス20人、全てネパールの学生達だ。「昨日、友達を食べました！」と学生。「助詞は『を』ですか？友達『を』ではなく友達：何ですか？」と投げかける私に「と！」「をじゃない！」と、あちらこちらから答えが飛んでくる。「富士山に行ったことはありますか？」と聞けば「ふじさんって誰ですか？」と返ってくる。つくづく、日本語とは何と難しい言語かと痛感する日々である。

平均月収2万円にも満たないネパールから来た学生にとって、日本で買う鉛筆1本、消しゴム1つも高価なことを知る。と同時に、彼らが捻出してきた莫大な学費に報いるような授業をしなければという思いが募っていった。

そんな中で出会ったNさんという女子学生は、特に心配な学生の人だった。にぎやかなクラスの中で一番大人しい性格。助詞の使い方や漢字が苦手で、時に彼女が鉛筆を握った手に私が手を添えて文字を練習することもしばしばだった。質問したいことが上手く伝えられず涙目になったこともある。しかし、彼女が家でもコツコツ勉強していることは、日に日に短くなっていく鉛筆を見れば明らかだった。アルバイト先にも恵まれ、時が経つにつれ、会話も驚くほどスムーズになっていった。

そんな彼女が、クラス一番乗りで念願の就職を決めた。彼女が学校を去る日。私に「先生、これをもらってください」と笑顔で握った手を差し出した。開いた指の中から出てきたのは、使い続けて小さく小さくなった、欠片のような鉛筆。私は、その努力の結晶を落とさないよう両手で受け取りながら言った。「助詞の『を』の使い方、100点ですね」。微笑みを湛えたまま、彼女は目に涙を浮かべた。

さあ、今日も日本語にどっぶりつかる180分が始まる。「お守り」をペンケースにしのばせて、間違いを恐れない、あのにぎやかな教室へ向かうとしよう。

「特別賞」

女神湖の女神

松田 由喜子（兵庫県）

姑が亡くなった年の夏、舅を連れて信州へ出かけた。舅は若かりし頃、甲斐駒ヶ岳、八ヶ岳連峰などを踏破した山男である。そんな舅に、どこに行きたいか尋ねたところ、意外にも女神湖の名をあげた。

女神湖は信州蓼科の白樺湖の奥にある一周約四十分ほどの小さな湖だ。奥には立ち枯れの木々もあって神秘的な風情があった。遊歩道のあちこちに咲く小さな草花、緑色に輝く水面、遠くに臨む蓼科山。八十歳を越えた舅の歩調に合わせて、私たち夫婦はゆっくりと進む。途中、「疲れた」と言つて舅がベンチで休憩した。その際、財布から一枚の写真を取り出した。セピア色をした白黒写真には、二十代とおぼしき舅と姑が写っている。背後に湖が見えた。

「実はね。ここで妻にプロポーズしたんだ。ここが夫婦のスタート地点なんだ。」

姑を失つて三カ月、ほとんど外出せずに悲しみに暮れていた舅が、子供のような笑顔を見せた。女神湖が舅を笑顔にさせてくれたことに私は大いに慰められた。

帰宅すると、舅は長らく休んでいた散歩を再開させた。その理由が、もう一度女神湖に行きたいからだと言った私は、散歩に付き添うようになった。

「どうして女神湖でプロポーズしたんですか」

尋ねると、舅は鼻に皺を寄せて笑った。

「何てだったって、あそこは女神だろ」

そうか。舅にとっては姑こそが女神だったのだ。だから女神湖を選んだ。そうして湖は、そこに行くだけで笑顔になれる場所となったのだ。

舅と女神湖に行く機会は、その後も続いた。両親の思い出の詰まった湖は、私たち夫婦にも笑顔を与えてくれた。五回目に出かけたとき、舅の車椅子を夫と交替で押した。その年が最後になると悟っていたのだらう、舅は満面に笑みを浮かべながら、名残を惜しむように湖面を見つめ続けた。

「優秀賞」

おい！顔を貸せ！

本田 美徳（大阪府）

半世紀以上前。広島から大阪に転校したのは小学校五年生の時だ。その初日。私はいきなりクラスメートの男子五人に囲まれて「おい！顔を貸せ！」とリーダーらしい奴にいわれた。転校生への洗礼だ。理由もなく三人がかりで羽交い締めにされた。だが実は私は広島では柔道を習っていた。二人を軽く放り投げるとリーダーが叫んだ。「気をつけろ！こいつ、強いぞっ！」今なら大変な虐めだが当時は笑ってしまう話だ。それがK君との出会いでその後、彼と私はすぐに仲良くなった。彼の家族は両親と二人のお姉さんで家までよく遊びに行った。賑やかで居心地の良い家庭だった。中学から大学までよく遊びに行つた。賑や私は警察官になり、彼は子供の頃からの夢だった海上自衛官になった。陸と海とで離れていても手紙でお互いを励まし合つた。

歳月が流れ、ともに定年退職を迎えた時、彼は丘に上がった。だがご両親と下のお姉さんは亡くなって独身の彼だけが実家に住んだ。

久々に訪ねて行くと仏間に両親とお姉さんの写真があつた。「よく来てくれたなあ。」

笑顔で迎えてくれた彼と昔話をした。帰りに玄関まで見送つてくれた時、ふいに私の眼に涙が溢れた。羨ましいぐらいに賑やかだった彼の家族。もういないのだと思うと…それから彼は浴びるように酒を飲んで泥酔を繰り返す。「寂しいねん…」いつもそう呟いて。

その頃私は再就職先の民間病院で働き出したばかりだったが職員に欠員が生じた。「誰か良い人がいたら採用したい。」採用担当から言われて閃いたのがあの言葉だ。「おい！顔を貸せ！」面食らう彼に履歴書を書かせて職場まで引っ張って行って面接試験に漕ぎつけた。その数日後。彼の採用が決まり、二人で笑顔の万歳を叫んだ。今、彼と私は同僚だ。「おい！顔を貸せ！」といった小学校五年生は再び同じ言葉を半世紀以上が経つていわれたのだ。長い歳月が経つても彼と私は固い友情と友愛の愛顔で毎日、忙しく働いている。

「優秀賞」

父の部屋の香り

原 稔宏（徳島県）

六月五日。チーン、とリンが鳴る。

仏壇の前の座布団で正座している母の丸まった背中があった。父の十七回忌。早いものだ。手を解いた母が言った。「二階に行ってみよう」と。二階は父の部屋である。「でもなあ…」ぼくは母の横に座った。二階に行くにはあの階段を上らなければならない。

父は根っからの芸術家であった。刈り上げのオールバックにポマードを塗りたいくっていた。油絵の絵の具が染み付いたエプロンからは揮発性油の匂いがする。二つが合わさった空気は強烈で、それが階下まで汚染した。誰も二階には行かず、とりわけ母は嫌った。

母は今年九十。実家には週に数回、一人暮らしの母の様子を見に行っている。父が亡くなってからはあの部屋とはご無沙汰である。

超急勾配の階段の幅はほんの1mほどでぼくでさえ怖い。「わかった。連れて行つたら」母は四つん這いになり一段一段を手で上がる。ぼくは後ろから肩でお尻を支えながら、母の足首を持って一段ずつ上げていく。突き当たりのドアをドンと開けた。ところがあの香りが消えていた。母がぼつりと「嗅ぎたかったのに…」と悲しそうに。一つ息を吐き、見渡す。四方の壁には父のキャンバスが十枚ほど立て掛けてあった。正面には木炭での下描きの絵があった。これ、なんの絵やろ。

なんととはなしに戸棚に目を遣ると、父の日記が立て掛けてあった。手に取ってぺらぺらと捲っていく。最後は二〇〇八年六月一日。その三日後、父は救急車で運ばれた。一日の日記に目を落とす。『瑞宝双光章受章のときの絵を描き始める』と。はっとしてさっきの絵を見た。キャンバスには二人らしき人物が。これは父と母だ。「母ちゃん」声をかける。背中を向けた母が。えっ。絵の具の蓋を開けてクンクンしているではないか。振り向いた母の鼻先には赤の絵の具が付いている。ぷつと吹き出した。「なに？」と首を傾げるその仕草が可愛くて、ぼくは泣きながら笑った。

「優秀賞」

大人、エンエン

木村 康宏（愛知県）

果たせぬ約束がずっと胸に残っていた。

約二十年前、学生の私は飲食店でアルバイトをしていた。

同僚で、同じ年のSくんとは仲が良かった。彼はフリーターで、料理人を目指していた。いつも笑顔だったSくんは、その裏で店の社員にいじめられていた。

私は運営会社に報告した。その結果、なぜか私が解雇された。悔しくて虚しかったが、ふと気づくと私は笑っていた。

人は悲しみの果てに、笑ってしまうのかもしれない。

Sくんのいつもの笑顔も、きつと同じだったのだと気づいた。

後日、彼と話をした。

「お店の人から聞いたよ。君が動いてくれたって。ありがとう」

私はもう気にしていなかった。クビになって、清々していたくらいだ。Sくんは別の店で修業を始めるという。夢を追う、精悍な顔つきの男になっていった。

「いつか自分の店を持つから、そのときは必ずきてね。美味しい料理を食べさせるから」

私は「うん、約束だ」とこたえた。

それから十年後、Sくんから店を開いたと連絡があった。だが私は遠方に住み、仕事に追われていたので、訪ねることはなかった。

本当は夢を叶えた彼に会うのが、怖かったのかもしれない。胸を張って会える自信がなかった。

さらに時は流れ、Sくんとは疎遠になった。だが忘れたことはなかった。ある日、私用で彼の店の近くへ行く機会があり、思いきって予約を入れた。

店を訪れると、立派な個室に通された。やがて調理白衣をまとったSくんが現れた。

言葉を交わすより先に、私たちは子どものように泣いた。

「お互い、もう四十歳か」と笑い合うつもりだったのに。

そこへ、Sくんの妻と三歳の娘さんが顔を出した。

娘さんがつぶやく。

「おとながエンエンしてる。おかしいね」

その言葉に、私たちはようやく笑った。

人は本当に悲しいとき、笑ってしまうことがある。そして本当にうれいとき、大人でもエンエンしてしまうこともある。

約束の夜に、私はしこたま酔った。

「知事賞」

私とレモンの種

藤村 慧依（愛媛県）

ある夏の日、私は父の好きなレモンを切っていた。じゅるつと溢れる果汁の中につやつやと光る小さな種がなんとなく宝物のように見えた。私は好奇心が湧いた。

「レモンってスーパーで買ったものに入っている種から育てられるのだろうか」

この日から、私とレモンの成長が始まった。

まず、レモンの種の固い部分を手で取り除いたものを湿らせたキッチンペーパーにのせて、芽が出るのを待った。当事小学生だった私は、待つことが苦手で、一日の間に三・四回さんよんかいくらいは確認していたので、芽が出たとき跳んで喜んだのを今でも覚えている。その種を小さな植木鉢で育てた。冬は寒さに弱くて元気がなく、夏は強い日差しで葉が少し焼けることもあった。大切に育てた葉が虫に食べられて穴だらけになっていてショックを受けた日もあった。しかし、その度に調べて対策を考えたおかげで私もレモンも強くなることができた。

小さな植木鉢から大きなものに植え替えるのを繰り返しているうちにレモンの木はみるみる大きくなり、今では私の背と同じくらいまで成長した。私の爪より小さかったあの種が、何年もの時間をかけてこんなに大きくなったのだ。この木の「生きる力」を見てみると、植物にも意志や感情があるのではないかと思ってしまう程の成長っぷりだ。

私は、いつかこの木にレモンの実がなる日を夢見ながらこれからもレモンの木に水をやり、見守り続けようと思う。種から育てたこの木に、続けることの大切さやいのちの強さを教えてもらったから、私も恩返しをする。父にレモンの実をプレゼントするのを楽しみに今日もレモンに水をあげていると、私もレモンの木も自然と笑顔になった。

「私が卒業するのと、あんたが実をつけるの。どっちが先か勝負だよっ！」

「優秀賞」

理想の夫婦

安永 有花（愛媛県）

私の両親は特別仲が良いかというそんなことはなく、かといって仲が悪いわけでもない。結婚記念日に何か特別なことをすることはなく、ちよつとした口論をときどきしている。母から父の愚痴をたびたび聞くし、父は母と姉の喧嘩が始まると、加勢することなく一目散に逃げていく。しかし、母の日や父の日には必ず贈り物をお互いに贈っている。土日の買い物や祖父母の農作業の手伝いも、二人でいつも行っている。父は服を買ったら、すぐ母に「これ、かっこええやろ。」と見せている。母も愚痴と同じくらいの頻度で、父の良い所を私に言うてくる。私は、これまで両親がお互いに直接的な言葉で愛を伝えているのを見たことがなかった。初めてその言葉を聞いたのは、今年の日である。

私の父は、車で通勤しており、毎朝ラジオを車の中で流しているらしい。母の日の昼ご飯、私も部活が終わって、父母とたこ焼きを食べている時、父の聞いているラジオの話になった。父はいつにも増してニコニコして、自分の投稿がラジオ番組で読まれたんだと話してくれた。そのアーカイブを三人で聞くことにした。そして父の投稿が読まれた。「ペンネーム、やすぱんさん。今週の日曜日は母の日ですね。私の妻は毎日おいしいお弁当を作ってくれます。もうすぐ結婚して三十年になります。日頃、恥ずかしくて面と向かって感謝を伝えられていません。この場を借りて伝えたいと思います。いつもありがとうございます。これからもよろしくおねがいします。」そして、リクエスト曲は、二人が結婚式で使った曲だった。私は、お父さんなかなかやるじゃんと感じた。父と母は私の両親である前に、夫婦だと改めて実感して、娘として少し不思議な気持ちになった。いつも、タメ口で話している両親が、律義に敬語で「これからもよろしくおねがいします。」と照れながら言い合っている姿に、私も自然に笑みがこぼれた。私も結婚したら、こんな夫婦になりたい。

「優秀賞」

細い線

三浦 喜琉（愛媛県）

私はどのような状況でも筆を止めない。昔から絵を描くことは好きだった。線を繋げてやがて形になる。そのような行為が誰のためになるのか、何を生むのかなんて、考えたことはなかった。

「じいちゃん。俺、絵を描く学校に行きたい。」
祖父の家でふと漏らした一言だった。

「絵を描きたいなんて勉強できん言い訳よ。」
思っていたよりずっと冷たい返事が返ってきた。苦笑いする私に、祖母も続ける。

「普通の大学じゃないと応援はしません。」
幼い頃私が描いた絵を二人とも笑顔で受け取ってくれたのだが進路の話となれば、まるで遊びの延長のようにはしか見てくれない。私の絵は、誰の心も動かせないんだと思った。

しばらく経ったある日、父は大量の荷物を車に詰めていた。離婚の話が成立し、別居の準備をしている。私は二人の仲がいいものではないと知っていたので、反対はしなかった。その日、父は私に家族への思いを涙ながらに語った。続けて私の絵の話もしてくれた。これが最後の会話になると思ったのだろうか。

普段は言わないことも丁寧に伝えてくれた。

「絶対に好きなことをしろよ。」

その日の父の言葉だ。私は私の絵を信じてもいい。父の言葉は簡潔ながら優しかった。

翌日、家に帰ると父はいない。私は今日も筆を止めない。

「絵が完成したら見せてほしい。」
父からのメールだ。私は絵を描くことが好きだ。誰かのために絵を描けるから。線を繋げて、やがて形になる。いつかまた家族がひとつの形になるように。

「優秀賞」

背中を押すよ

弘松 詩菜（愛媛県）

四十九日を過ぎたら天国に行く背中を押してあげないといけな
いよとお坊さんが言っていた。私は怪談話や幽霊は怖い。でもおじい
ちゃんの幽霊なら怖くない。そばにいて困った時や悲しい時は姿を
見せて助けてくれたらいいなと思っちゃう。

お母さんと口喧嘩した時に私に加勢してくれたり、学校で嫌なこ
とがあった時に変顔で笑わせてくれたり、テストでわからない問題が出
たときに教えてくれたり、幽霊おじいちゃんがそばにしていると大助かり
だなと想像したりする。

おじいちゃんは大阪に住んでいたから三か月に一回くらいしか会
いにいけなかった。たまにしか会えなかったけど会った時はたくさん話
した。耳が遠くて話がかみ合わなくて、それがおもしろくてたくさん
一緒に笑った。車いすに乗って散歩に行って一緒にボーっと過ごす時
間も好きだった。いつもお土産で買っていくベビー母恵夢を「これ、す
ごい美味しいんやで。食べてみ」と言う。私が持つていくお土産だけど
なぜか得意げに笑い、美味しいから食べると毎回勧めてくれる。

そんなとぼけたおじいちゃんがそばにいたら毎日私は笑顔で過ごせ
るに違いない。

でもね、ずっと私のそばにしていると天国にいけなくておじいちゃん
がしんどくなるとお坊さんが言う。

寂しくて悲しい。でも笑顔でお仏壇の前で手を合わせる。私、おじ
いちゃんの背中を押すよ。天国から見えてね。

元気がでない時には母恵夢を勧めてくるおとぼけな笑顔のおじい
ちゃんの写真をみることにしよう。